

研究推進支援本部 Presents

Sci-Comm. Café

科学コミュニケーションカフェ

第4回：SDGsと研究 ～世界のために研究者ができること～

1. SDGsが変える社会の仕組み —SDGsはただのお題目ではない？
 - I. 変わるお金の流れ —ESG投資、CSRからCSVへ
 - II. 大学とSDGs
2. SDGsと研究活動
 - I. 関わり方は十人十色
 - II. 5つのポイント：場づくり・テーマ設定・橋渡し・発信・人づくり
 - III. SDGs研究のためのプラットフォーム・ファンド紹介
3. 本学研究者による事例紹介
平和水文学 ～いまそこにある水危機から世界を救うには～
4. 自由座談会



1月13日（木）17:00～18:30

講師：国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）経営企画部
持続可能な社会推進室 調査役 **山田 浩貴** 副調査役 **平川 祥子**
中央大学 理工学部 都市環境工学科 教授 **手計 太一**

会場：オンライン（事前登録制・Webexミーティング）
終了後30分程会場を確保しておりますので、情報交換や交流の場としてご利用ください。

対象者：本学所属の研究者
（教員から大学院生まで、専門・所属を問わず）
・SDGs関連研究に興味がある、取り組んでいる方
・SDGsについてより深く知りたい方

登録：<https://forms.gle/sLNrHWT3TQcbyEVq5> (Googleフォーム)



お問い合わせ： 研究推進支援本部 gakusai-grp@g.chuo-u.ac.jp

本イベントでは、SDGs(Sustainable Development Goals,持続可能な開発目標)の概要から、変わる社会システムの話、そしてSDGs研究のノウハウやファンド、研究事例の紹介を通じて、理念から現場レベルまで、研究者のSDGsへの疑問にお答えします！

SDGsが変える社会の仕組み

SDGsについて、「志は立派だけど、本当に実効性があるのかな。」と疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれません。しかし世界経済の潮流は、確実にSDGsのポリシーに沿いつつあり、今や世界の投資額の8割が「ESG (Environment, Social, Governance)投資」になっているといえます。すなわち、いかなる事業者も環境や社会課題を考慮せずに事業を行うことが困難になりつつあり、大学もその例外ではありません。SDGsを背景に変化する社会と、大学が取るべき対応についてお話しします。

世界のために研究者ができること

SDGsへの研究者の関わり方は多種多様です。さまざまなステークホルダーを巻き込んだ課題解決型研究もあれば、研究のゴールをSDGsに紐づける方法、テーマそのものは関係なくとも環境や社会に配慮したアプローチを取る方法など、関わり方は研究者の数だけあります。研究ノウハウから具体的なツールやファンド、さまざまな研究事例まで、研究者に役立つ情報を提供します。

本学研究者、手計教授による事例紹介

ヨルダン川やナイル川、チグリス・ユーフラテス川など、世界には水利権が国際紛争の種となっている場所がたくさんあります。水文学という科学的アプローチから平和への道筋を探究する試みを紹介します。

講師

山田 浩貴 (やまだ ひろたか)

国立研究開発法人科学技術振興機構 経営企画部 持続可能な社会推進室 調査役
国内IT企業等で従事した後、2007年JSTに入構。2018年4月より現職。科学技術イノベーションを通じたSDGs推進活動に従事。2021年3月、執筆メンバーの一人として参加した、報告書「SDGs達成に向けた科学技術イノベーションの実践」を発表。

平川 祥子 (ひらかわしょうこ)

国立研究開発法人科学技術振興機構 経営企画部 持続可能な社会推進室 副調査役
2009年JSTに入構。2019年4月より現職。科学技術イノベーションを通じたSDGs推進活動に従事し、SDGsに関する国内外の動向把握と情報発信、地域SDGs推進のための場づくり、機構のSDGs推進強化策の策定や施策構想に取り組む。

手計 太一 (てばかり たいち)

中央大学 理工学部 都市環境学科 教授
(独)土木研究所、福岡大学、富山県立大学を経て現職。タイ、ミャンマー、ラオス、ベトナム、チュニジアなどで治水、水環境に関する研究に従事。タイSATREPS、神通川ISOLVEプロジェクトを通して中進国や国内のSDGsへの貢献に取り組んでいる。

企画・ファシリテーター：福井智一 (研究推進支援本部URA)

登録はこちら <https://forms.gle/sLNrHWT3TQcbyEVq5>



研究推進支援本部は、中長期事業計画に基づき学際的研究推進プラットフォームである「Cognitive Diversity」コンソーシアム実現を目指しています。「学彩プログラム」は、その包括的な取組としてURAが中心となって取り組んでいる研究推進活動です。

「科学コミュニケーションカフェ」は、学彩プログラムのひとつ、「共創の場の提供」に位置付けられており、本学研究者に科学コミュニケーションの考え方と技術をつたえることにより、学際的研究基盤形成、研究者個人の能力向上、および大学の社会貢献に寄与することを目的としています。

